有識者ヒアリング議事録②

1. 有識者名	中井孝幸氏（愛知工業大学 工学部 建築学科 教授）
2. 日時	令和２年７月７日（火）14:00～16:30
3. 場所	岡町図書館３階　集会室１・２
4. 配付資料	1.　（仮称）中央図書館基本構想について 2.　中央館構想骨子案 3.　市立図書館の概況と構想策定について 4.　主なヒアリング事項について 5.　（仮称）中央館図書館基本構想の構成案 6.　豊中市立図書館に関するアンケート調査報告書【概要版】 7.　豊中市の図書館活動　平成 30 年度（2018 年度）版

5. 内容

1.　公共図書館施策の動向について

① これからの図書館サービスのあり方

・　これからの図書館は本の貸し借りをするだけの施設ではない。手芸や創作、演技やギターの練習等、市民に図書館に来てもらい盛んに活動してもらう。それに対応可能な多様な資料を揃え、市民のさまざまな活動をサポートしていくことがこれからの図書館のあり方ではないか。市民の活動の場として、資料で市民の活動をサポートする役割を果たすべきである。

・　今後人口比率においても大人の割合が高まる。大人向けのサービスに重点を移す戦略を取ることも選択肢の１つである。近年、大人向けのおはなし会や、自らが住んでいる地域について知ることのできる、大人向けのイベントが人気を博している。

・　子どもを介して形成されるコミュニティもあるが、少子高齢化が進むと、どのように地域コミュニティを維持するかが問題となる。地域コミュニティから抜け落ちる層へのサービスも検討してはどうか。市域全体で画一的なサービスを提供するのではなく、地域ごとの特性を踏まえて特色付けたサービスを行っても良い。

② 広域連携・アウトリーチ

・　北摂地区７市３町の中で一番人口が多いのが豊中市であるなら、豊中市が広域連携において中心的な役割を期待される。図書館以外の施設でも広域連携は行われているはずで、図書館においては大きな図書館を持つ市がハブになり、グラウンドや野球場は別の市が中心になるなど、さまざま活動で役割分担できれば良い。

・　広域連携の中で蔵書の役割分担ができるのであれば、豊中市の強みを打ち出す意味で、特長あるコレクションをさらに伸ばしていってはどうか。教員支援用の資料等、教育に特化していることは優れた長所である。図書館と学校が連携して、新しい学級向けセットや授業への資料活用法を構築し、資料とともに司書も貸出し、学校図書館と公共図書館が協力して授業支援に取り組むことが望ましい。私たちの調査では、学校図書館を利用する子どもと公共図書館を利用する子どもは相関性が非常に高い。より身近な学校図書館で読む習慣を身に着け、

そこから公共図書館につなぐことが必要だ。公共図書館と学校図書館との連携では、実際には一緒に会議をしている程度に留まる事例が多い。豊中市には充実した学級向けセットと配送システムがあるため、さらに授業に食い込んでいくことができるはずである。学校の先生と今以上に勉強会を行い、図書を使った調べ学習のやり方を出張講座で行うと良い。それも1つの広域連携である。豊中市の学級向けセットは豊富に揃っており、同じ本が複数あることで資料費を圧迫する面もあるが、強みにもなる。一般の利用者からは利用できないが、ゆくゆくはそちらへのサービス向上にもつながっていく。子どもに本を使った調べ学習の面白さが分かってもらえると非常に良い。学校から図書館に来てもらい、子どもたちが本がたくさんある世界観を体験するのも良い。

③ 市民協働

・ 市民協働に積極的に取組んでいる図書館の事例を見ると、さまざまな活動をされている市民の中のキーマンと図書館が上手く協働している。豊中市では現在さまざまな市民活動が行われており、そうした団体やキーマンと図書館が上手につながってゆけば、お互い補いながら良いサービスが展開できるだろう。施設面積だけが全てではない。面積が小さくても、質の高い活動が図書館を介して行われていれば評価されるべきである。

2. 施設再編の方向性について

① 階層的な機能配置の留意点

・ 人口40万人の市における中央図書館の位置付けとして考えると、岡町図書館は狭い。もっとボリュームが必要である。人口40万人の市で、図書館の規模を市全体で2万㎡だとすると、新中央図書館だけで1万㎡程度は必要なのではないか。

・ 施設の機能配置のあり方としては2つの方向性がありうる。中央館と分館という配置とするか、または中央館を置かずに同規模の分館を数多く設置するかである。同規模分館の例では、東近江市のように7館ある図書館に各々特徴を持たせている市もある。市民は、CD・DVDを借りるとき、子どもの本を借りるとき、薬や医療の本ならこの図書館、と使い分けている。そういった機能配置のあり方もあるが、やはり40万人クラスの市だと、大きな中央館を設置すべきである。そのとき、蔵書のストック機能がポイントとなる。各分館は開架のみでも良いが、役割分担を可能とするためには、中央館がきちんと蔵書のストック機能を備えていることが必要である。

・ 市の総合管理計画では公共施設全体で延床面積を平成26年度比の80%にすると伺ったが、非常に厳しい目標値だと感じる。たとえば安城市のように、市長をアメリカや北欧の評価の高い図書館への視察に連れてゆくというのはどうか。首長の意識が変わらないと状況を変えるのは難しい。

・ 施設の維持管理費は、古い施設を維持するほうが当然コストはかかる。概ね建物の減価償却の期間は60年と言われているが、いま市で試算されている計画では80年程度利用する想定になっているのではないか。60年で耐用年数が終わる施設を20年間延ばして利用しても、おそらく20年後に建て替えた場合の費用は、維持管理費の上昇分が上乗せされ、決して安くな

らないと思う。古い施設を利用すればするほど修繕費や維持費はかかっていく。先程拝見したように雨漏りも発生する。

・ 図書館だけで１万㎡の床面積を確保することが難しいのであれば、会議室等の共用スペースは図書館の専有面積から除外し、図書館専用部分だけで 5,000 ㎡程度は確保できるように計画できないか。そのような配分が可能であれば地域の市民が利用しやすい図書館となる。

・ 削減目標があるとはいえ、やはり１万㎡程度の図書館を整備するのが望ましい。図書館だけではなく、他の老朽化している公民館等の文化施設を併せて整備してはどうか。図書館がその施設の受け持っていた生涯学習・社会教育活動を引き受けることで、１万㎡規模の図書館を整備したほうが良い。

・ 図書館の必要面積については、文科省が定める「図書館の設置及び運営上の望ましい基準」をぜひ活用してほしい。これは全国における貸出密度上位 10%の図書館を人口規模ごとにピックアップし、それらの館の各種データの平均値を取ることで算出した基準である。

・ 中央図書館の整備では、市域全体からの利用を考慮し、公共交通機関だけでなく駐車場が必要である。駅に隣接している一宮市立中央図書館の利用料は最初の１時間だけ無料で以降 30 分ごとに 100 円かかる設定では非常に高い印象で、2 時間は無料にすべきである。また、上りながら斜路に停車するタイプの止めにくい立体駐車場などが理由で、利用しづらい図書館となるのは残念である。駐車のしやすさや移動のしやすさへの配慮は必要になる。東京の図書館にはほとんど駐車場がない。これは半径数百ｍごとの徒歩圏内に図書館があるためである。このような利用環境であればともかく、地方都市の場合利用者の交通手段の 7 割、多い地域だと 8 割は車であり、かつ平面駐車場を確保する必要があると言われている。

・ 必要台数の想定について、豊中市で車を所有する市民の割合を考えると、全体のうち車で来館する利用者の割合は 7 割までは至らないのではないか。通常想定する必要台数の 0.5 倍から 0.7 倍程度の範囲で設定するのが良いと思う。

・ 車での移動だとある程度距離の離れた場所でも行くことができる。その感覚で、面積を確保しづらい中心市街地より適切と考えて郊外に図書館を整備する例が多いが、やはり人口が少ない地域に整備すると利用されなくなってしまう。

② 分館に求められる機能

・ アンケート調査では、複数の図書館を利用しているという回答が、1990 年代ごろには 2 割だったが、近年 4 割程度まで伸びている。東近江市の調査では、日に複数の図書館をはしごする利用者がかなりの数いる。豊中市でも、我々が考えている以上に利用者が複数の図書館を使っている可能性がある。1 つの事例として、瀬戸市では、中学校区に 1 つくらいの小学校で、学校図書館を土日だけ地域図書館として開放しているところもある。交通弱者層はその館でリクエストすることもできる。利用開放された学校図書館は、通常所蔵する児童向けの図書だけでなく、一般の図書も若干数所蔵している。そうした図書館利用を調査したところ、当初は中央図書館に行くことができない市民が予約で利用しているのかと考えていたが、調査結果を見ると中央館も併用していることが分かった。例えば、今日は孫を連れて学校図書

館に来たが普段は中央館を使っている、といった回答があった。図書館の利用者は私たちが考えている以上に各図書館のサービスレベルを見ており、この分野の資料であればこの館が強い、というように捉えている可能性がある。

3. 蔵書方針について

① 全般

・ 市が財政的に非常に厳しい状況の下で、図書館として何を守っていくかだが、資料費は死守すべきである。

② 施設・地域ごとの特色化

・ ある程度の資料の量がないとサービスの質を担保できない。収納できる量が決まっているのであれば、例えば子どもが多い地域では絵本を充実させる、高齢者やビジネス世代の市民が多いのであれば、そうした大人向けの本を充実させる等、地域の特性に合わせて多少棲み分けをしても良いのではないか。そうしたことを試しながら 10 年後に向けて今から戦略を立て、豊中市全体でワンチームになれば良い。中央館は中央館としての役割を果たし、他の各館は小さいけれども特徴を持っている、という機能配置にしても良いと思う。資料を分散させて各館が似たことを別々にやるよりも、あるジャンルであればこの館、というように資料を分野ごとに集約したほうが良い。配送車が市内を回り、利用者が最寄りの図書館でリクエストして 1 日 2 日待てば届くのであれば、蔵書の傾斜振り分けを行ってもカバーできるのではないか。あるいは、中央館に行けばすぐに借りられるのなら、利用者も中央図書館に行くかもしれない。豊中市内の図書館配置の中で戦略を立てたほうが良い。各地域で居住者層は大きく異なるのではないか。図書室を含め市内には数多くの館があるため、上手く活用していくべきである。予算を確保するためには、利用の実績を増やすしかない。

③ 電子書籍の活用

・ 電子書籍の活用は、図書館が果たすべき役割が何かということから考えるべきである。本を読むだけであれば、開架冊数は減っても良いのかもしれないが、図書館がさまざまな活動ができる場所であることは担保しなければいけない。大学で学生のレポートを読むと、別の資料や Web サイトから文章をコピー&ペーストしたものばかりで、考えることを放棄しているように見える。図書館の果たすべき役割というのは、人が考えたり、新しい何かを創造する手助けを行うことにある。ニューヨーク公共図書館での話を聞くと、さまざまな本を読んで感じるのは、建築家も含め、世界的に活躍している人物ほど本をよく読んでいる。自分がこれから行おうとしていることを他の誰かが既に行っていないか確認するためである。そうした情報はインターネットでも見られるかもしれないが、他の事例と自らが作ろうとしているものとの違いが何なのかは写真を見るだけでは分からない。建築であれば図面等で見て確認したいと思うだろう。新しい創造的な活動をしたい人ほど、きちんと調査を行う。

・ デジタルな資料・情報の比重がますます高まっていくのであれば本は減らしても良いのではないか、という考え方もあるが、仮に排架する冊数を減らすとしても、図書館という場が、人が考えたりアイデアを練ったりする場であることは担保したい。知的な創造活動を行うための場として、デジタルな世界だけでなく、実際に活動できる場所が求められている。そのための材料は本だけではないかもしれないが、デジタル化が進むことで物理的な本がなくなる

ことはないのではないか。

・ 館内の様子や統計資料を見た限り、本の冊数は足りていない。市域全体での蔵書冊数が「望ましい基準」に達していないと思われる。その規模の蔵書を持つためにはそれに対応した面積が必要である。資料のデジタル化で面積不足による問題を解消するのは難しいだろう。コロナの状況下でさまざまなリモートの試みがなされているが、それによって図書館がなくても良いと分かったかというと、逆に図書館の価値が実感されたのではないか。

4. （仮称）中央図書館の機能イメージや事業手法について

① 図書館整備の先進事例

・ 豊中市では 40 万人が非常にコンパクトなエリアの中に密集しているが、市の中心がどこなのか分かりづらい印象がある。

・ 近年、比較的人口が少ない地域で、新しいまちづくりの起爆剤として図書館が整備される事例が数多く見られる。豊中市のような人口が大きく密集している地域では、ぎふメディアコスモスが人口 40 万人の地域で大規模に整備された珍しい事例である。ぎふメディアコスモスの場合は、岐阜大学付属病院の跡地があり、このように大規模な施設の移転等がないと、なかなか図書館は整備しづらい。

・ 開架スペースに、閉架書庫に入れるまでの間に資料を一時的に置く書架を公開書庫として設けても良い。JIS 規格で書架の幅は 90cm と定められているため、一般に書架はその倍数である約 1.8mの間隔で設置されている。公開書庫ではそれを 1.5m程度に縮めて、車椅子利用者と一般利用者はすれ違うことはできないが、自身で取りに行くことができる通路幅としていることが多い。関連する事例では、田原市中央図書館のガレリアの壁面書架の仕組みは非常に良い。壁面に棚板を差し込める仕組みを作っておくことで、最初はギャラリーとして利用し、後に蔵書が増えてきた段階で書架として使えるようになっている。開架エリアにそうしたボリュームを受け止められる書架があると良い。田原市の調査では、利用者の多くは OPAC を使って資料を探すと考えていたが、想定していた以上に自分で棚を見て探す利用者が多かった。探しやすさという点では、資料が開架にあることには意味がある。利用者が OPAC で調べて出納依頼すると、その本が想像と違った場合もある。開架で現物を見られるようにして、利用者自身が借りるかどうかを判断したほうが良い。司書は出納作業に費やしていた時間をレファレンス等に充てられる。公開書庫の設置はぜひ前向きに考えてほしい。割合はそう多くなくとも良いが、多くの館が公開書庫に 3 万冊程度は置いており、それなりのボリュームを取っている。新聞のバックナンバーや利用率が低い資料を排架しておくと、利用者が自ら探して借りてゆく。

② 公共空間の創造方法

・ 古文書等をストックする貴重書庫が市内に 1 つは欲しい。歴史民俗資料館のような施設があり、別に保管するのであれば良いが、そうでなければ図書館に貴重書庫を備えたほうが良い。中央図書館の機能については、そうした検討も行うべきである。

・ ボランティア活動やさまざまな市民活動を可視化する事業を図書館が行い、利用者をその活動につなげていくというサービスもある。例えば、何らかの活動を行ってみたいがどこに相談して良いか分からない、といった問合せへの対応を図書館が実施する。周囲が宅地で人口が多く市民活動が盛んなのであれば、まずは団体に所属する市民に図書館に登録してもらい、そうした団体をつなぐ活動を行うことでも良い。まずそうしたソフト面の活動を行うべきであるが、ソフト面の取組みを実施するためにはハード面である施設や整備が本来必要である。新しい施設ができると利用者は集まるので、その際に継続的な利用者となるよう掴まなければならない。図書館では、幼い子どものために利用する利用者層がおり、そうした層は子どもが育つと図書館から遠のいていく。新館の開館によって利用から遠のいていた市民の需要の掘り起こしができることは大きい。そうやって訪れた館に新しい本があれば、それが借りられることでまた貸出のサイクルが始まる。返却のためだけに中央図書館に行くのが面倒ならば、最寄りの図書館に返却するだろう。そうした貸出サイクルが回り始めれば、中央館だけでなく地域の分館への利用ニーズも高まるのではないかと考えている。新しい図書館を整備すると利用者が集まり、いままで知られることのなかったさまざまな活動が目にしてもらえる。そこを起点にしてつながっていけば良い。本当はソフト面だけではなく、新しい施設を整備して見える化することが望ましいが、それは 10 年後のあるべき姿とし、その目標に向けて、いまできることから始めると良い。せっかく新しい中央図書館を整備するのであれば、何か豊中モデルと呼べるような取組みを考えたほうが良い。人口 40 万の豊中市にはポテンシャルがあり、さまざまな可能性がある。それをつなぐ役割を、庁内の所管の壁等を越えて図書館が取り組むべきである。福祉や子どもの分野から始めるとよい。例えば関係課による乳幼児健診のお知らせを図書館でも配付したり、ブックスタート等で協力することから関係を強化していくと良い。組織として連携の土壌を醸成する必要がある。

・ メイカースペースのような新しい空間として、海外では、変身コーナーというのがある。子どもたちがマントを着てスーパーマンに着替える、ただそれだけの活動のためのコーナーが図書館に設置されている。図書館が、本もあり、工作もでき、着替えてごっこ遊びもできる、そうした家庭ではできない非日常の活動を行う場と捉えられている。諸外国では図書館がさまざまな役割を引き受けているように見える。図書館に関する文化が日本とは異なる。日本の図書館の静かに勉強ができる雰囲気を望ましいと考える市民も当然いるので、その機能は残しつつ、にぎやかな図書館を作っていけば良い。

・ 防災拠点として図書館を考えると、書架が倒れる恐れがあるため、避難施設には適さない。災害時は情報の入手が難しくなる。そのとき図書館は情報提供の場として本領を発揮するはずである。直営の場合、市の職員が避難所の応援等に駆り出され、人手が足りずに開館できないといったことが起こる。図書館専属で配置されている指定管理者のほうが開館できることもあるようだ。

・ 東日本大震災は 3 月 11 日に起こったが、被害を受けた中で、気仙沼市では、部分開館だが 3 月中に開館した館もあった。2 年後に調査を実施し、開館時期について利用者に尋ねると、さらに早い時期の開館が望ましかったとする声やちょうど良い時期だと評価する回答が多かった。早い時期に再開館した図書館では、開館時期に対する要求・評価が高いことが伺えた。一

方で再開館が遅かった館では特にそのことに対する反応がなかった。図書館の開館をやはり市民は待っていた印象がある。日常的な生活のサイクルに戻るために、図書館の利用は我々が考えている以上に役立つのかもしれない。南三陸町のように、移動図書館車の巡回で仮設住宅に避難した町民に本を届け、安否確認も兼ねる自治体もあった。避難者は、本のやりとりの際にまちの様子を職員に確認することができた。災害時にほぼインターネットが使えない状態となったとき、図書館の持つ、物と情報を伝達できるネットワークシステムは長所になる。

③ 特徴的な事業手法

・ 予算獲得については、いま現在中心市街地活性化等の補助金がないため、再開発の際に国交省から交付される補助金が最も規模が大きい。

・ PFI により図書館を整備する事例が増えているが、契約に基づいて事業が実施されるため、内容を少し変更するだけでも書類変更の手間が大きくかかってしまう。一度内容が固まると、後で自治体と事業者とがお互いに変えたほうが良いと分かっていても変更できない。自治体が変更のための追加費用を払うと言えば事業者は対応するが、当然そういったことはあまりない。自治体の要望は要求水準書に書いてあることになっているため、本来であればそれを受けて設計された図面を確認し、自治体側から変更を改めて要望できれば良いのだが、なかなかその機会がなく上手く行かない。ただ、財政的に厳しい自治体では、単年度で百数十億円といった建設工事費を一度に計上するより、20 年ローンで支払っていくほうが事業としては当然実施しやすいだろう。

・ 複合施設とする場合、複合化の相手が、体育館やプール、ホール等、公共の文化施設であれば問題は少ないが、マンションやホテル、オフィスビルとの複合化となると、相手のほうがボリュームが大きいために、スパンや建築計画においてそちらが優先されてしまう。相手方の建築計画がまずあり、その何層分を図書館に充てるという優先順位になってしまう。例えば上層階にマンションがあるために、住民用のエレベーターシャフトの配置が優先されて、図書館側から見ると開架室の真ん中に視線を遮る壁ができてしまうといったことが起こる。大規模な駅前開発等でマンションが施設機能に入ってくると、マンションを施設上層に積もうとする力学が働くため、留意が必要である。また、マンション住民や図書館利用者のプライバシーが侵害されないよう注意する必要がある。民間機能を別棟とし、1 つの敷地内で高層棟と低層棟をセットで整備するのであれば問題は生じない。上層に積む場合も、低層部と高層部を分けて考えるのであれば良い。図書館が近接していると、マンションの付加価値は高くなる。そうした利点を活かしながら上手く組み合わせていけば良い。

・ PFI で整備されたもので、良い図書館建築はあまりないと言える。自治体が要求水準書を作成し、事業者がそれを元に設計等を行った後、本来はもう一度自治体に戻し確認しなければならない。その段階で内容を詰めることができていないために、互いに不満を持ったまま事業が進むことになってしまう。せっかく一体で計画しても、運営が別で、図書館と市民学習センターの休館日が異なり、ガランとした休館日の図書館内を通って市民学習センターを利用するといったことも起こりうる。仮に民間資本を活用しながらも市がイニシアチブをとって

整備しようとするのであれば、運営方法や予算面での検討が必要であろう。

・ クラウドファンディングで建設費まで集めるのはさすがに無理である。

・ 既存施設を再利用して図書館を整備すると、さまざまな制約が生まれる。まず必要な積載荷重が全く異なる。既存施設を使う場合も部分的に残すかたちとし、書庫等荷重の大きなエリアは新築で整備する等としたほうが望ましい。いま図書館には開放的な開架スペースが求められている。利用者は明るくて広々とした開架を体験したいはずである。廃校になった小学校の既存校舎を一部解体して閉架書庫や事務室を入れ、開放的な明るい開架スペースをグラウンド側に増築し、上手く整備した潮来市の例もある。一方で、商業ビルの中に図書館が移転した徳島市の事例では、下の階が使われていたためエレベータが新設できず、図書館事務室から地下の閉架書庫に直接行くことができないケースもある。地下駐車場を経由してブックトラックを図書館の階まで上げるのは危険である。丸々ビル 1 棟を使わせてもらえるのなら良い。既存施設が全て一旦退去するのであれば、図書館向けに改修することができる。商業施設を改築して図書館を整備した鳥取市などの事例では、施設の大半を図書館に使うことができたため、大胆な改修を行うことができた。既存施設を再利用するとしても、例えば4層のうち1階を民間施設等、2～4 階を図書館にするのであれば、既存のテナント等が全て退去したあとで図書館部分の改築をまず行い、改築が終わってから 1 階に民間施設が入居するのであれば良い。下の階が営業し続ける条件の下で上の階に図書館を整備しようとすると、改装工事だけしか行えないため、図書館としては不十分なものになってしまう。駅前等にユニークな、例えば若者向けに雰囲気の良い内装を施した分館を整備するのであればそれでも良いだろうが、その条件で中央館を整備することは避けるべきである。既存施設を丸々1 棟使うことができる場合に初めて検討の対象とすべきだろう。

・ 図書館では書架が高くなるが、書架自体の高さと同じくらい、書架から天井までの空間を空けるべきである。3.5mほどの天井高がないと圧迫感を覚える。3,000～4,000 ㎡のフロアで天井高が 3m程度だと、やはり圧迫感がある。3,000 ㎡というと大きな体育館程度の広さで、天井が低い中にその面積があると圧迫感が出てしまう。天井全体でなくとも、部分的に天井高を確保した空間があれば良い。

・ 商業施設に図書館が移転した場合、連絡配送車の寄り付きも難しい。移動図書館車等をエレベータや自走式のスロープで図書館の事務室のそばまで上げられる環境になっていればまだ良いが、そういった設備はおそらく商業施設側にも利用されるため、施設のごみを廃棄するための動線と本が入ってくる動線が被ってしまい、そういった動線は望ましくない。

・ 商業施設への移転では、やはり積載荷重の限界があり、本が置けなくなってしまうのが最大の問題だろう。一見必要面積は満たしているようであっても、積載荷重が足りないために書架の段数を減らさざるを得なくなる。いまの図書館よりも閲覧席を増やしたいのに、低い書架ばかりが増え面積を占めてしまう。閉架書庫をどこに置くのかという問題もある。

・ インターネットが普及することを前提としていない時期に整備された図書館では、配線が引けずにパソコンを置くことができない。OPAC 用の端末は目録カードの代替物としてカウンター付近に置かれていることが多いが、実際には、書架の横等に設置したほうが利便性は高い。

紀伊國屋等の大きな書店は書架の間にスタンド式の検索機器等を置いている。今後図書館を整備するのであれば、床は二重床とし、どこに機器を設置するにしても配線を後から変更できるようにすべきである。床下を空調に使うかどうかは別にしても、床は上げて配線だけは変更可能としたほうがよい。天井も最初から詰めて3m程度に設定するのではなく、多少余裕を持たせて高くしておいたほうが良い。20年前に整備された図書館と最近整備された館を比べると、書架と閲覧席の占有面積では閲覧席の占める割合が増えているはずである。同じ延床面積5,000㎡の図書館でも開架を減らし閲覧席を増やす傾向となっている。そういった意味では面積にも多少余裕を持たせる必要がある。書架は床固定すべきだが、以降まったく配置変更をしないわけでもない。浦安市では閲覧席を増やすために、壁付きの低書架を減らして書架の配置を大きく変更した。このように変更は可能であるし起こりうる。図書館は50年60年使われる施設だから、先々のさまざまな可能性を考慮しないデザインにしてはいけない。例えば曲がりくねったデザインの書架を作ると二度と同じものが作れなくなる。書架は普通の書架で良い。部分的にデザインを凝らすのは良いが、過度にやりすぎると、将来変更するときに全て取り替えなければならなくなってしまう。ソフト面を考えても、せっかく生まれたさまざまなアイデアがハード上の制約で制限されてしまうことがあってはならない。施設としては余裕を持った計画とするのが良い。

5. その他

- 本日岡町図書館を見学したが、館内スペースが狭いため排架に苦労されているのだとは思うが、書架の固定やガラスの展示ケースの設置等、利用者に怪我がないよう配慮してほしい。
- コロナ対策のために閲覧席を減らすのは仕方ないが、30分という利用時間制限の中で利用者は本を選ぶことしかできず、選んだらすぐ帰ってしまうというのはあまりにも寂しい。多少椅子等を置いたほうが気持ちよく利用してもらえるのではないか。距離は取りつつ、閲覧席をある程度確保したほうが良い。自著にも書いたとおり、どの時間帯でも来館者の約65%が座って利用している実態がある。開館を心待ちにしていた利用者のためにも、座席数はある程度確保し、日常に近い利用ができるようにすると良い。私たちが東日本大震災の影響を調査したときにも感じたが、図書館利用が始まることで、何か日常が戻ってくるような感覚がある。避難所や仮設住宅での生活は狭くて行き場もない。そのとき図書館が仮設であっても開館したことは、市民の行き場を確保する意味で非常に重要だった。今回のコロナによるステイホームのときも多くの市民が感じていたはずだが、甚だストレスが溜まる。そういった意味で、災害時は未利用層にも図書館の意味を示すことができるチャンスとも捉えられる。
- 他の自治体でも図書館利用者はコロナ以前より少ない。このまま何もしなければ利用者数は戻らないと思われるため、何かアクションを起こしたほうが良い。コロナ後に利用の総量が減ったとしても、新規に何らかの利用が伸びたことを示すことが望ましい。
- 何か豊中モデルを構築できると良い。さまざまな地域の図書館が1つずつそうした特長を持っていれば良い。

以上